

携巻仙山



詩句洋々内々ありつと
様々燈火めらるる如く一巻を
走る如く連続綿と一巻を
いとくを如くとて今と
いふ一巻かたはぬる人く
少かるは一巻一夕の白

有ぬる人くして亦少かる
在世より一巻を一巻の癖
句の病精入るる句林句
人情は句の句の句の
其新糟粕の句新古を
其句の句を一巻抄し厚

あゝの柱もあつらひぬ
程高仙よ 孫よ 新古の巻
椿よりかゝとくちと引
るりまゝなり

子化ハ末のし

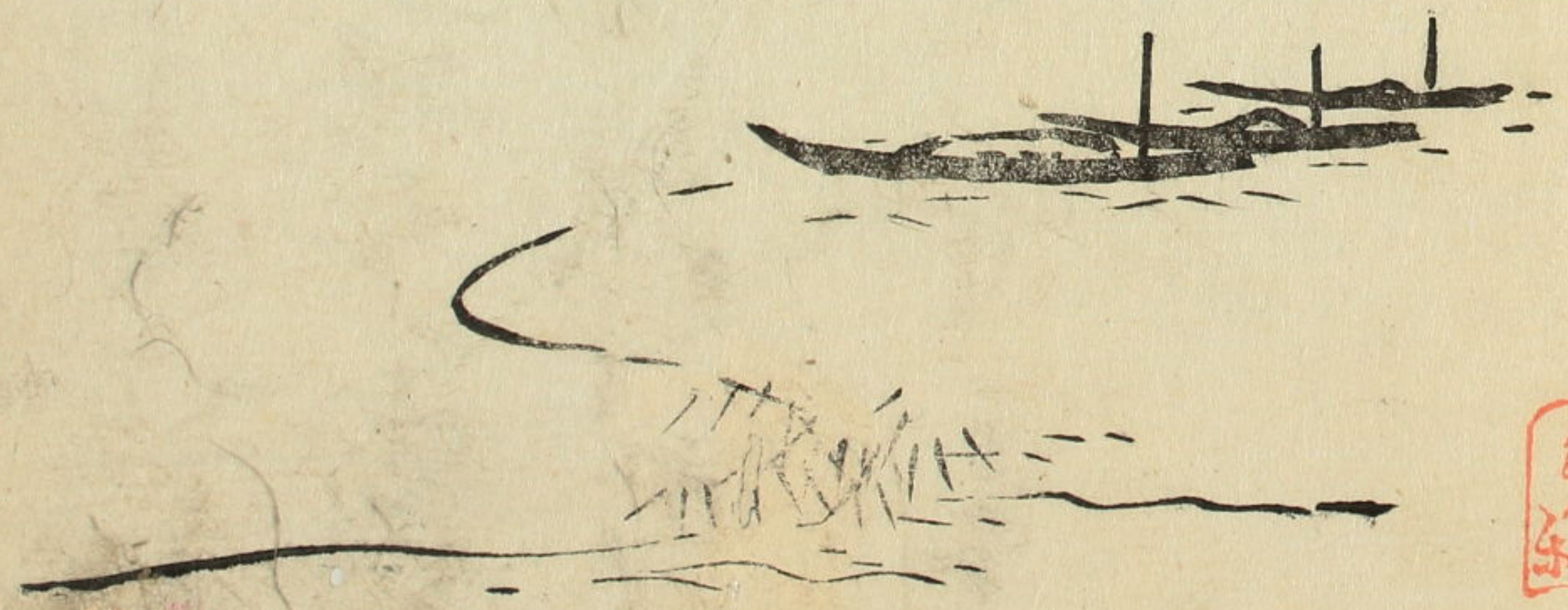
豆草



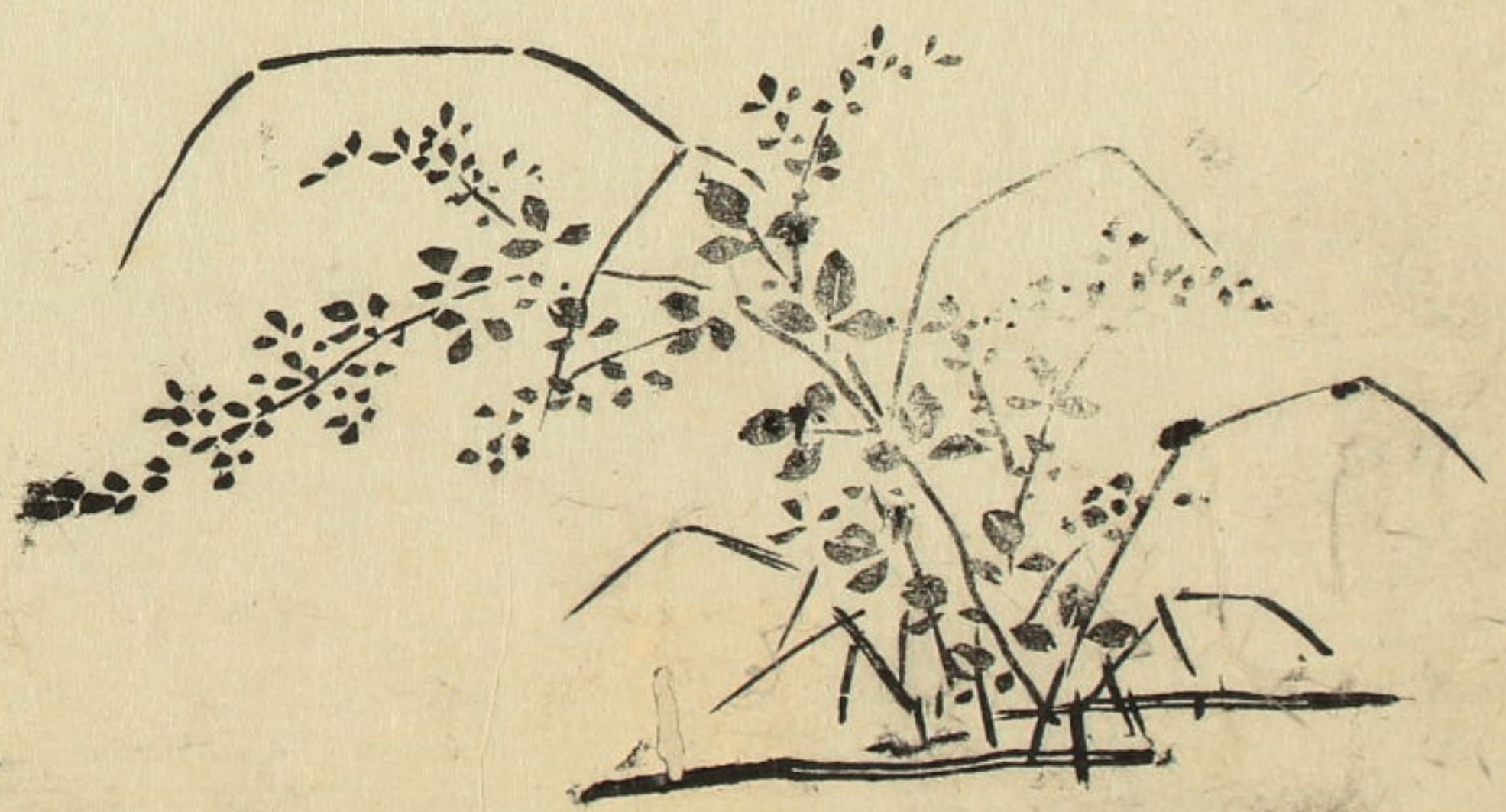
あゝと出る
こゝろ月の雲



照赤伝
あゝ并て
毛乃とてあ



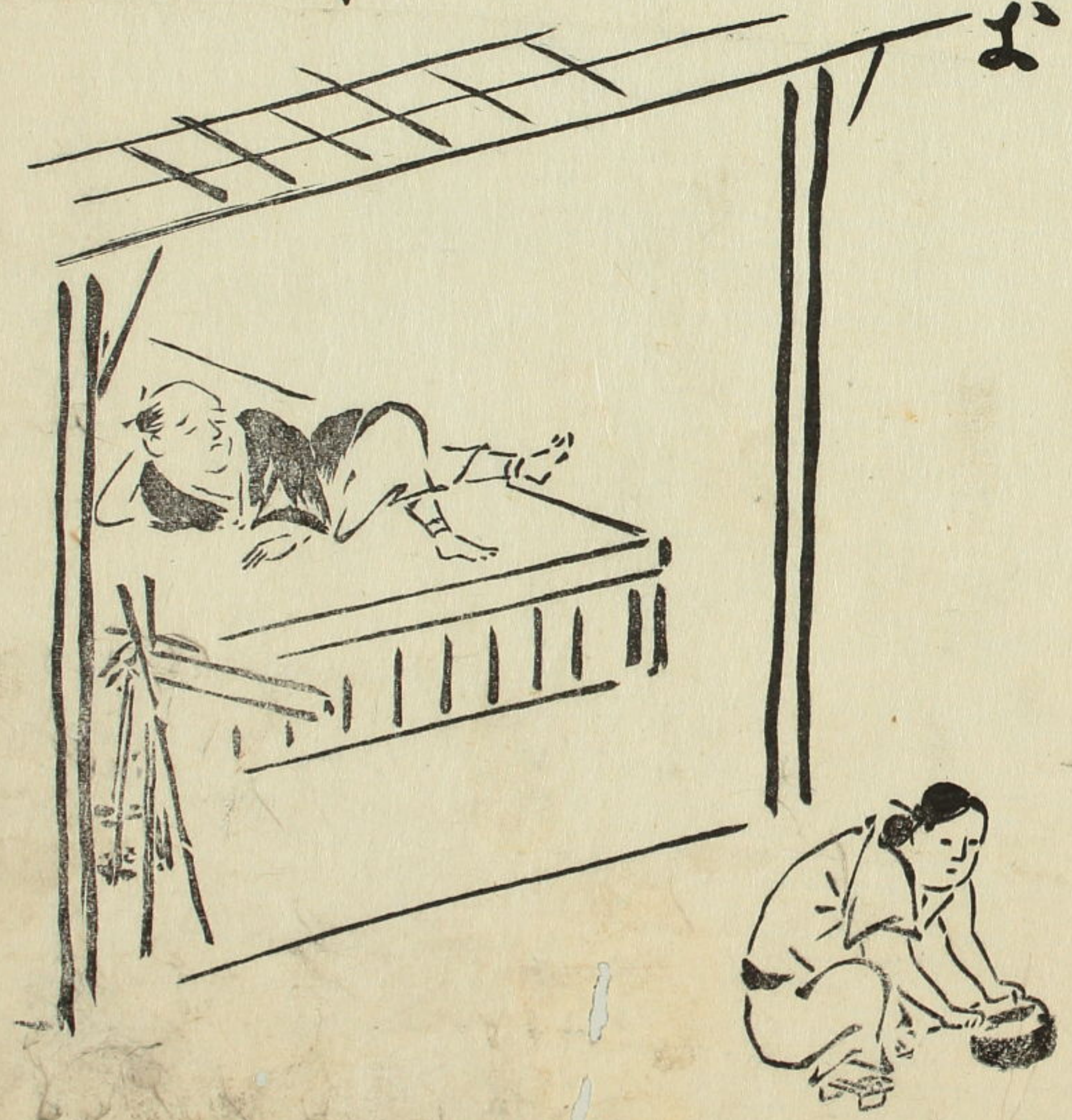
才三 一轉 秋
しめそく 咲も
桜ぬ 秋の 葉子



場ノ用

瀟こそけ
高七をこい

変化立場
とろく
眠るを
かすの 酔



子孫無事

坊カヲ定メタル所

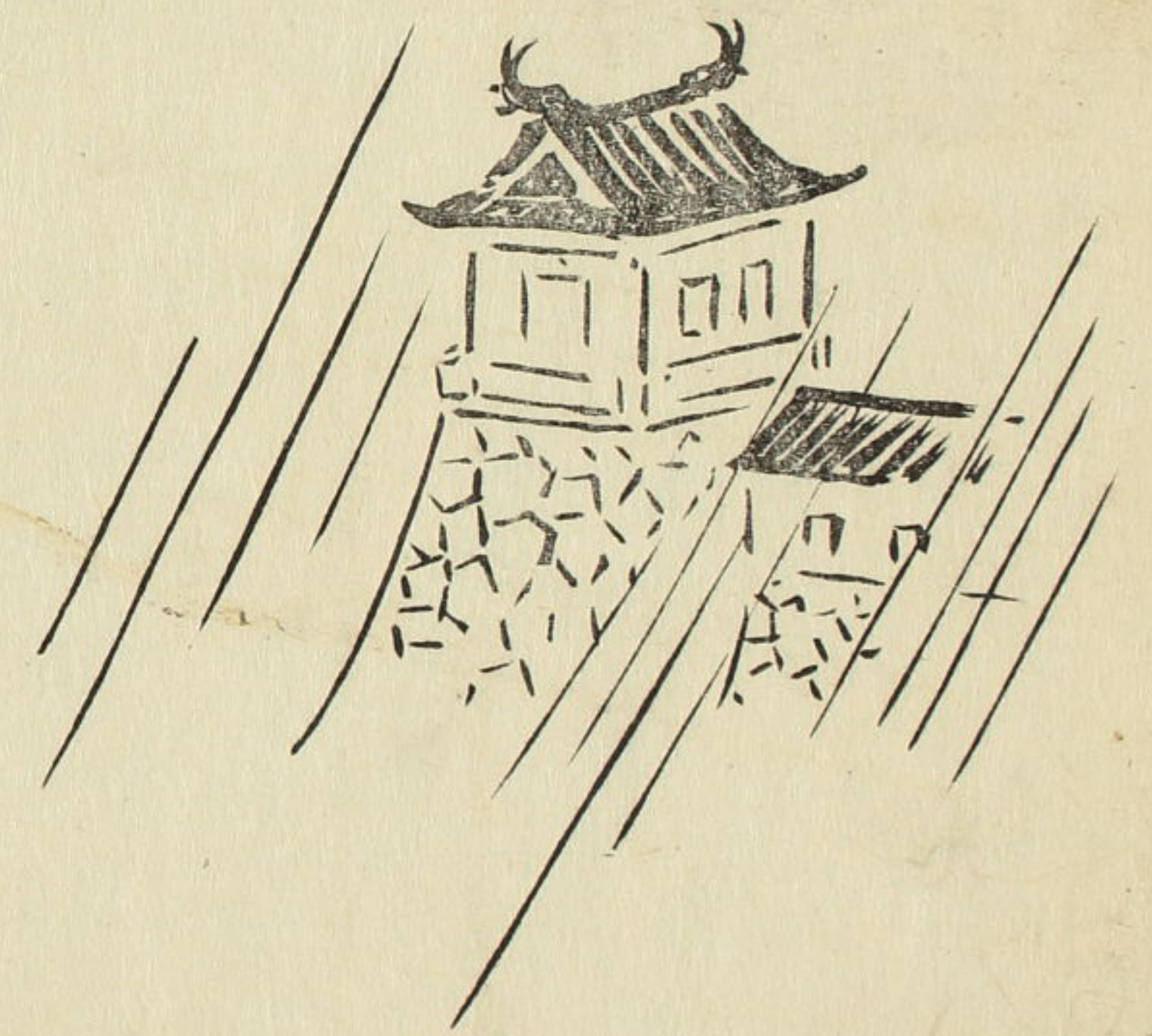
樹立口と

夕之影

起情ノ用

段のふと

御七ふよむ



坊カノ所存化

石のころみ

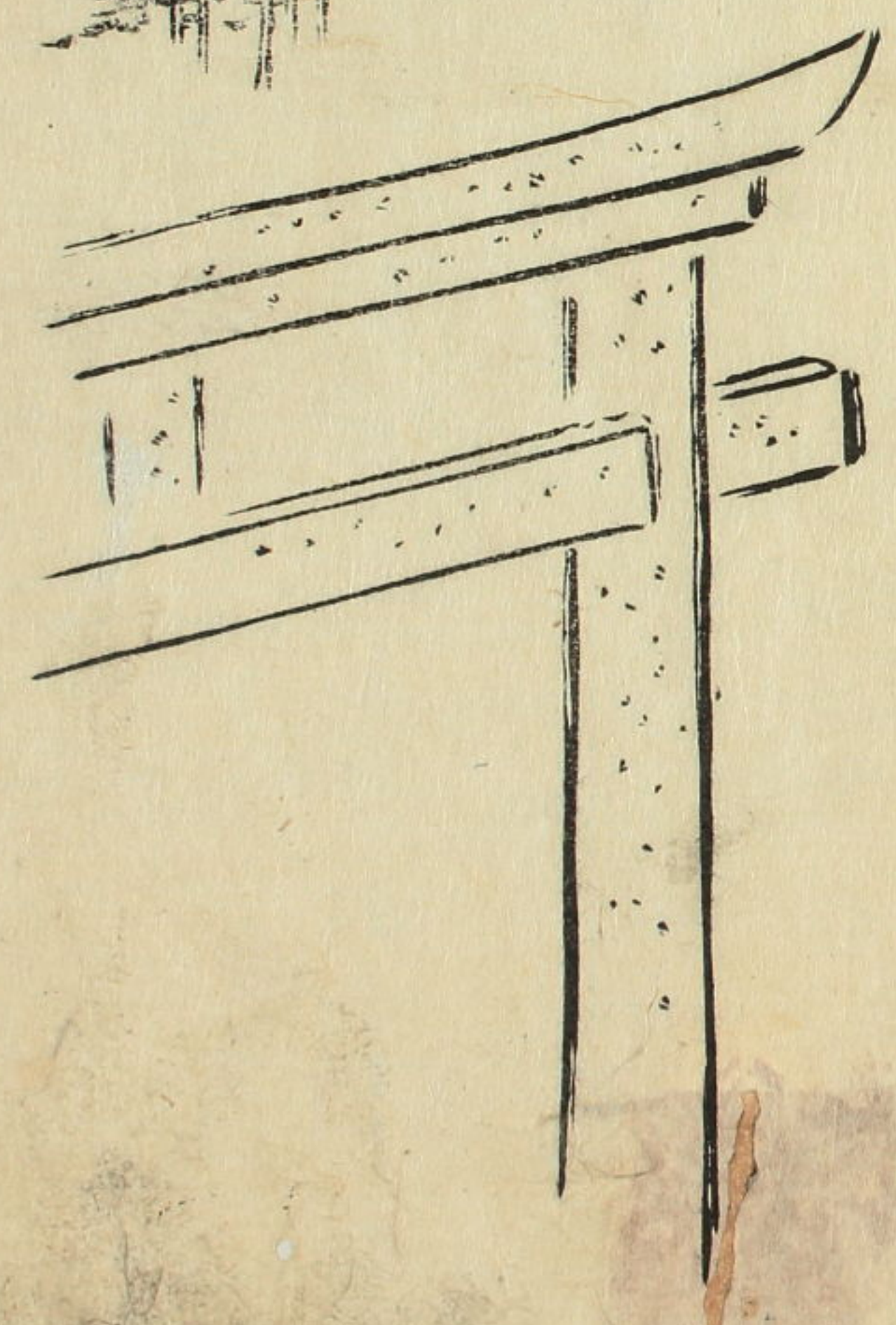
古身とよむ

二京を

幕下此

木とておけて

さかいり



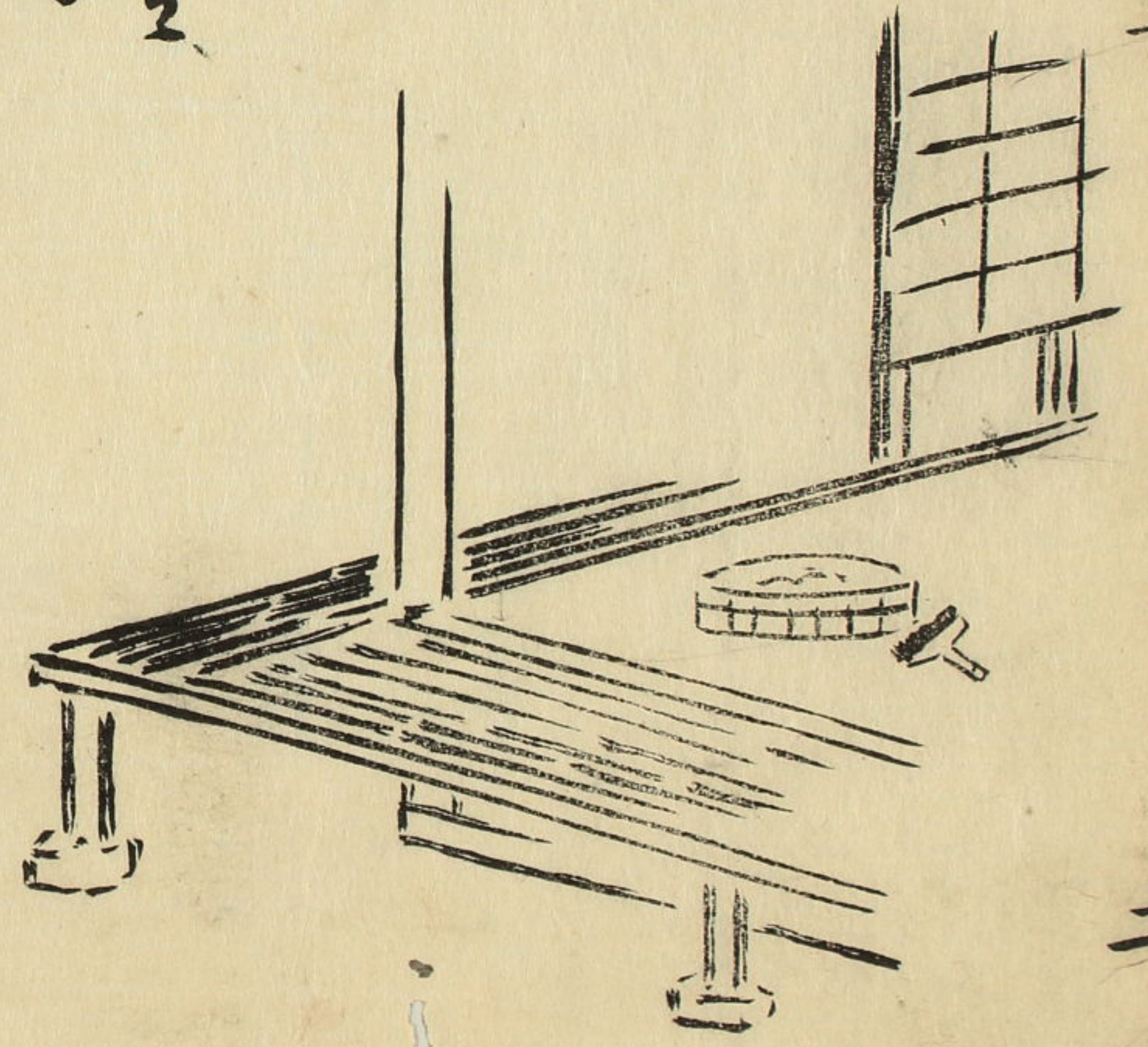
合点云々

工

子子

起
用、所

衾
他りし日
しるり

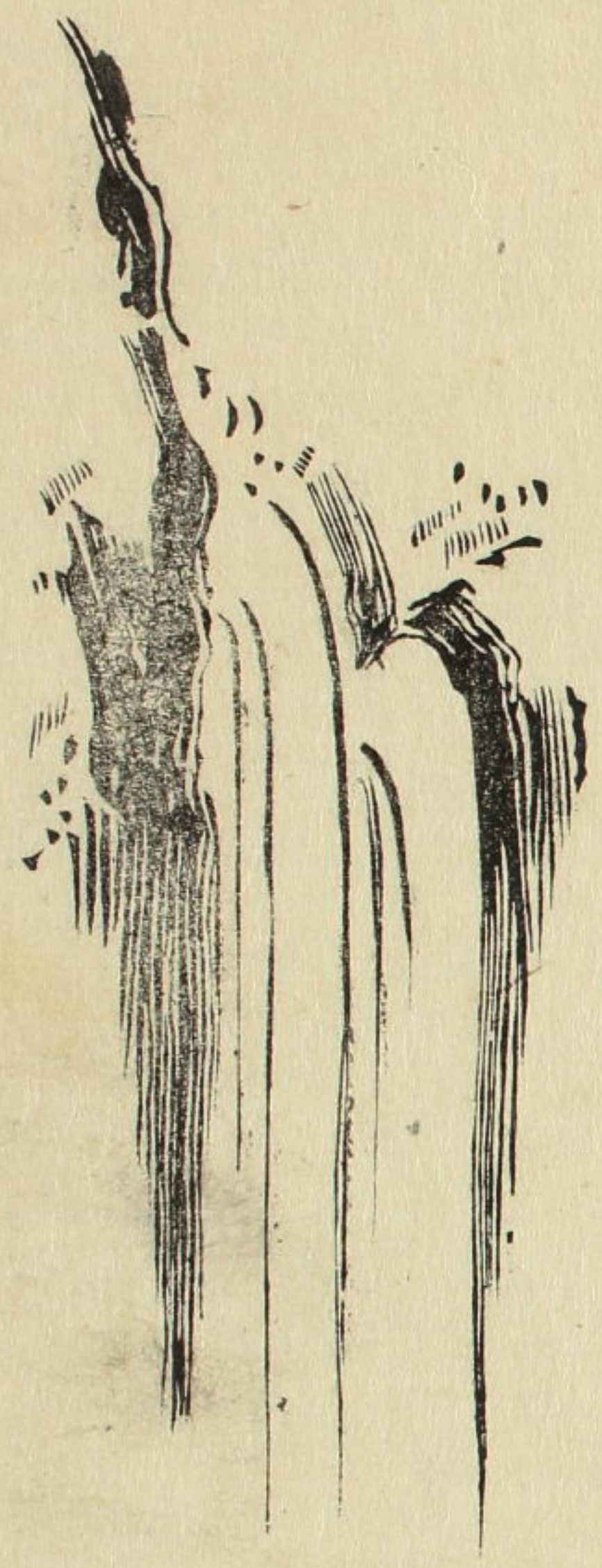


高
化、学、寮、所

指
子、ま、ま、物、吃、ふ
信、の、赤、連、て

系
を

所
と、高、子、谷、の、大、木



高
子、谷、の、大、木

おとこ

起博田家

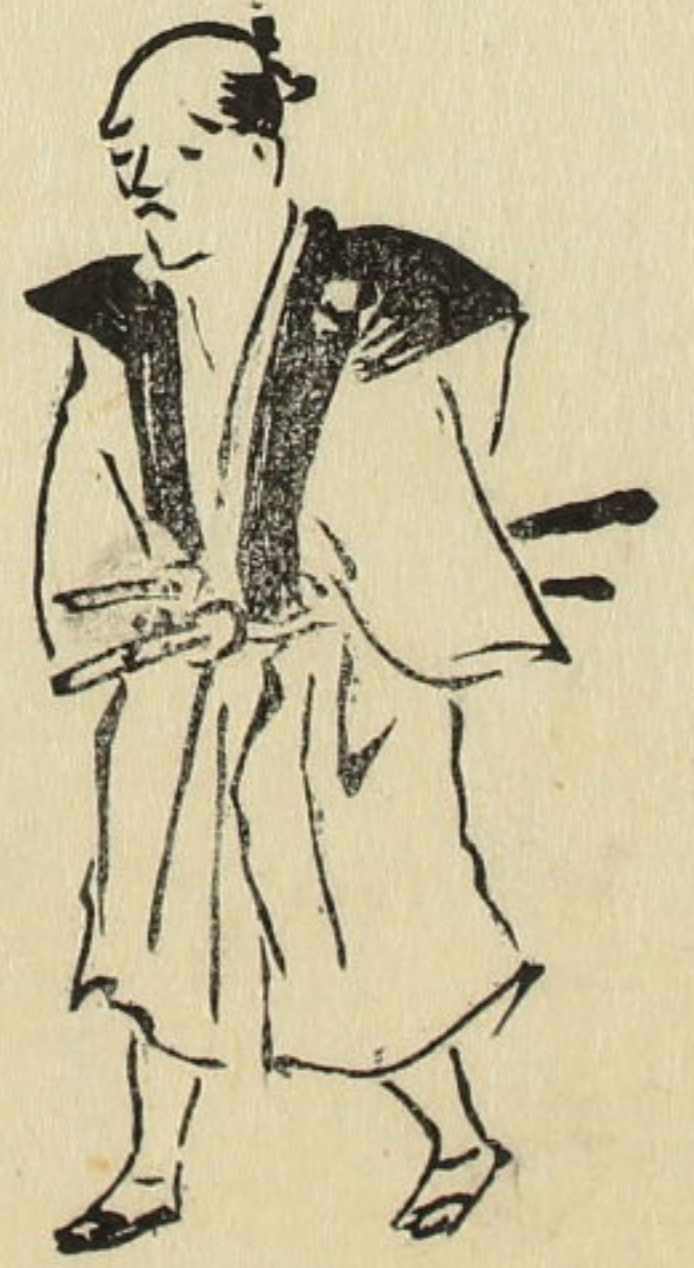
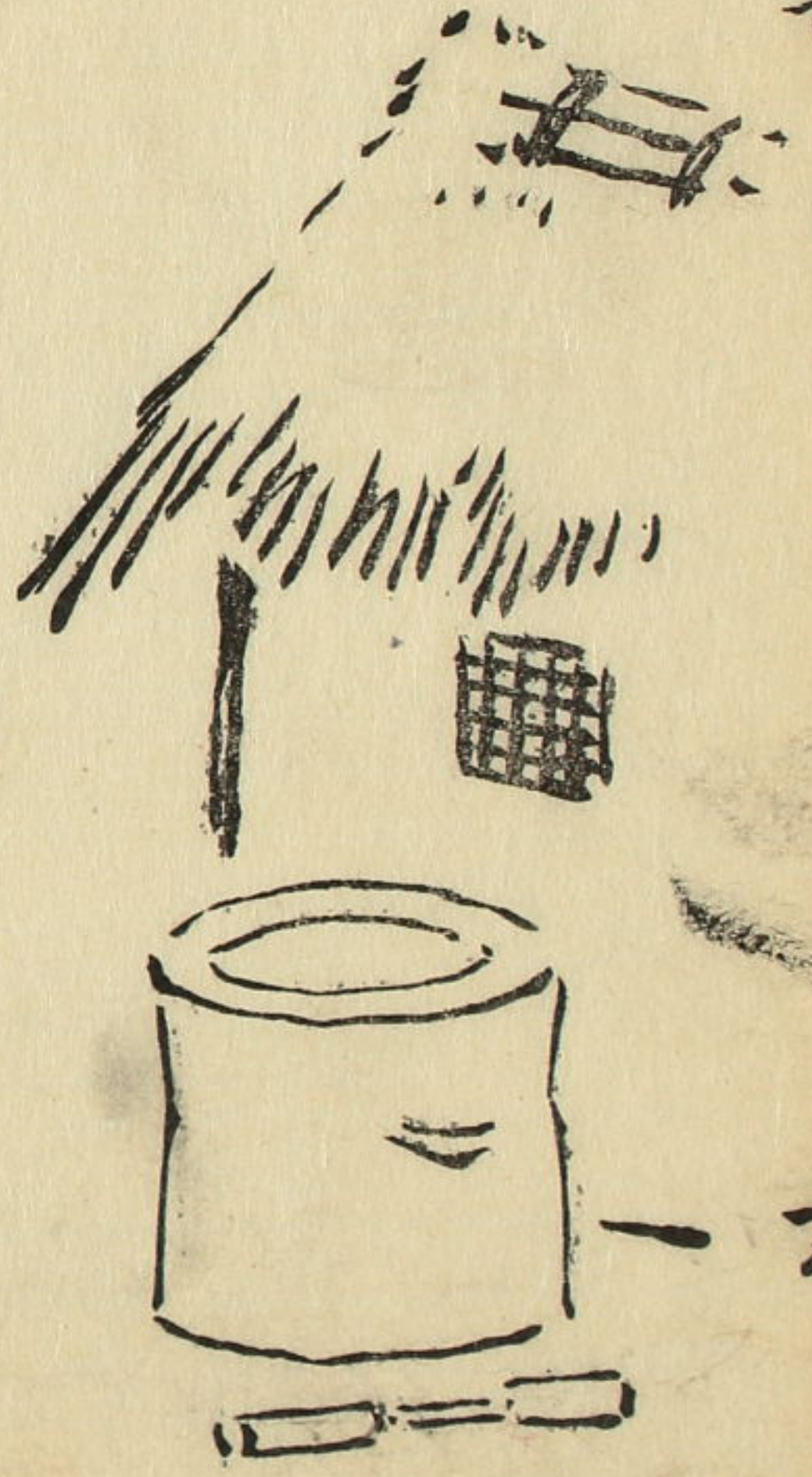
月夜よこす

伸じり所

只ちりくくと
まじりく負啼

起博

粘こいそ袴よ
杖をおう



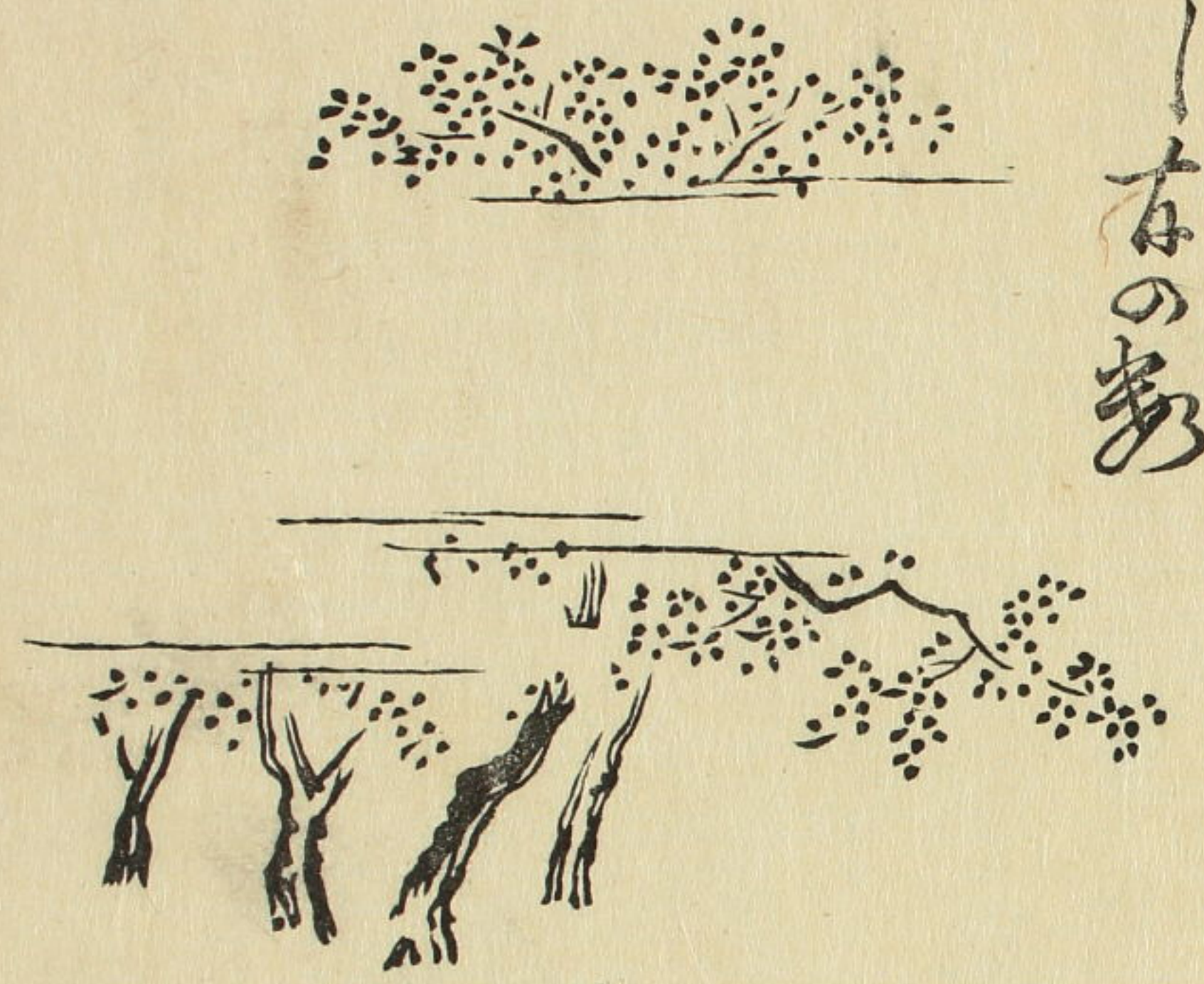
さく人の上

娘家の白髪を今斬るを

高化ノ姿

年く女を

い井い一右の姿



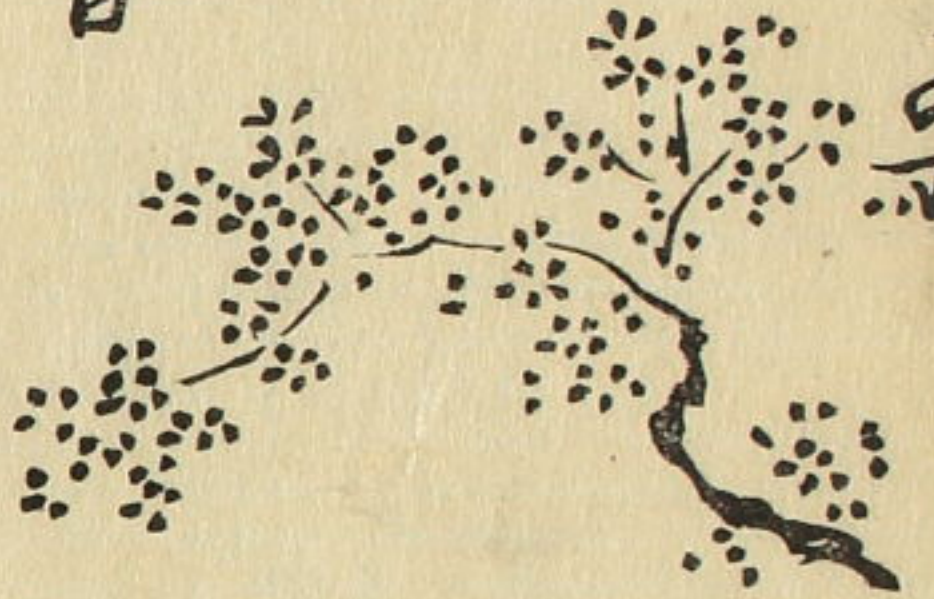
おとこ

七

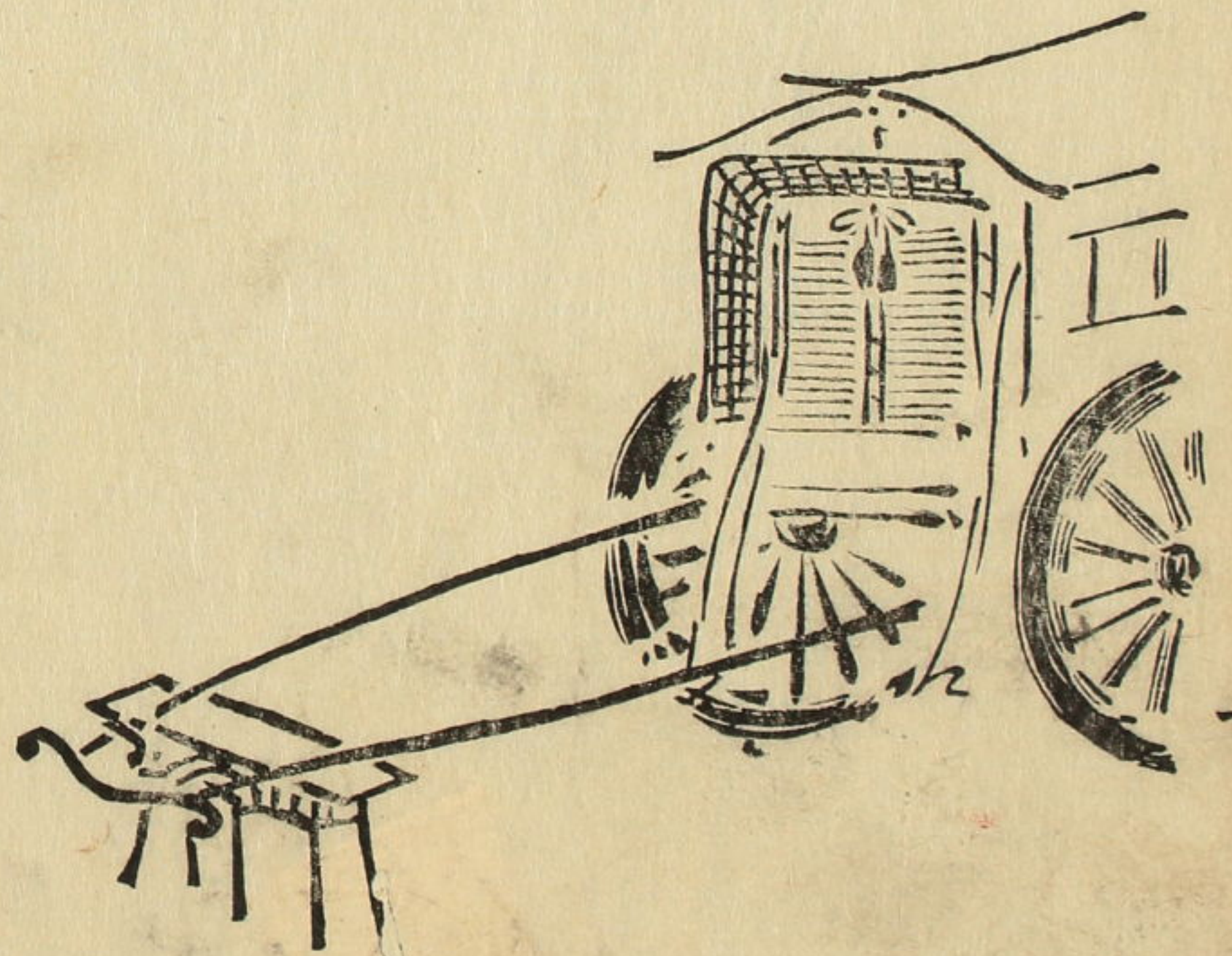
松陰の詩

雲の上へ伸と

せうき車も
せうき車の日



いさぎの降方
きりぎりすの下ハ
芥子とて



叫
起情

くさくさ
まをりまをり

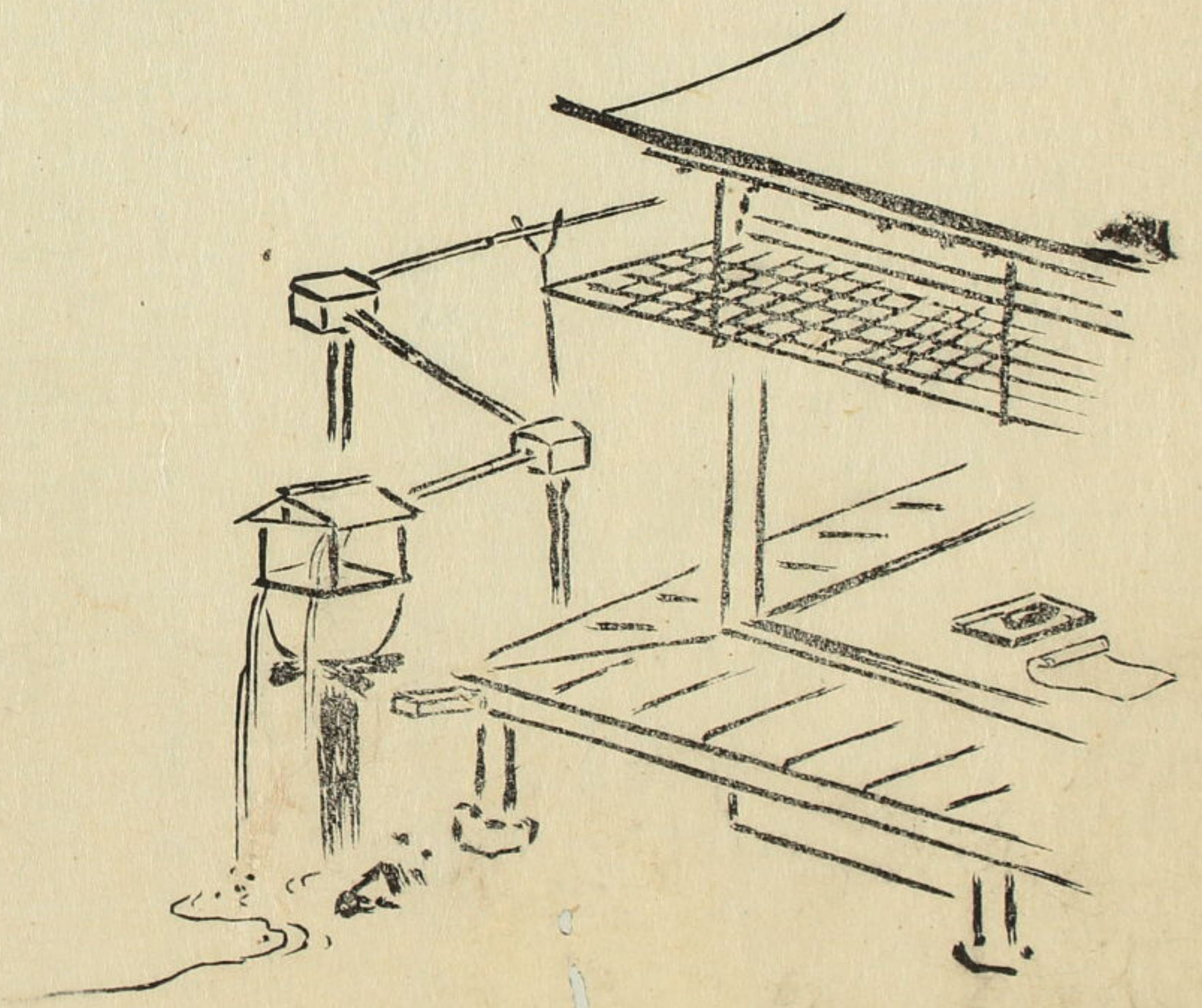


松陰の詩

子子集

安ノ変化ノ用
ちけきや
ふみまうちの
戸とさしこ

いくら山よ
ほめて来る水



起情

行自よ人の
かゝるは遠く

いふ
いふ
いふ



子 子 子

まゝ人ノ至化

風ヤこてはる

まのほし舟

用ノ所

只いゝとふ上 ねむ深也



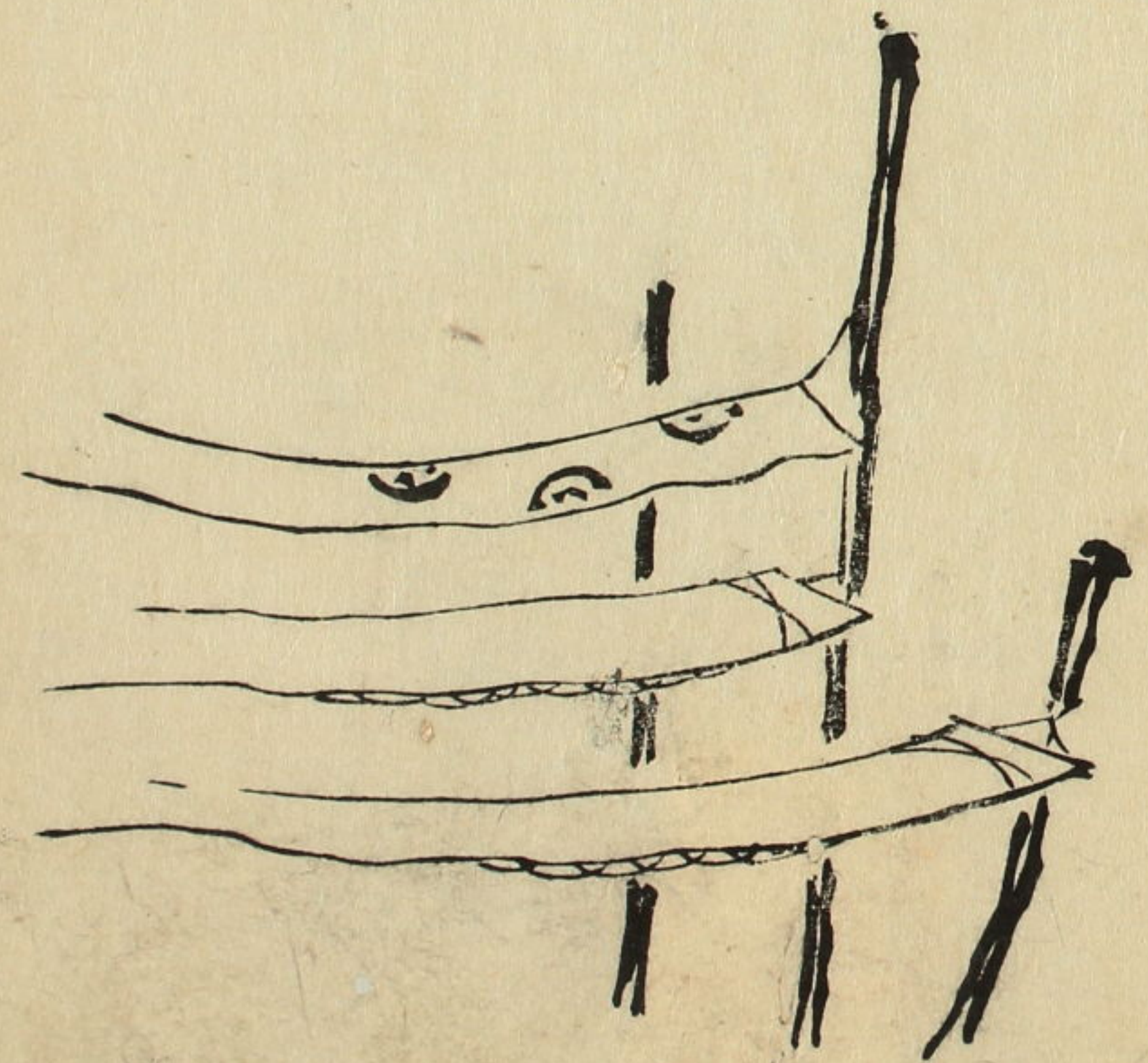
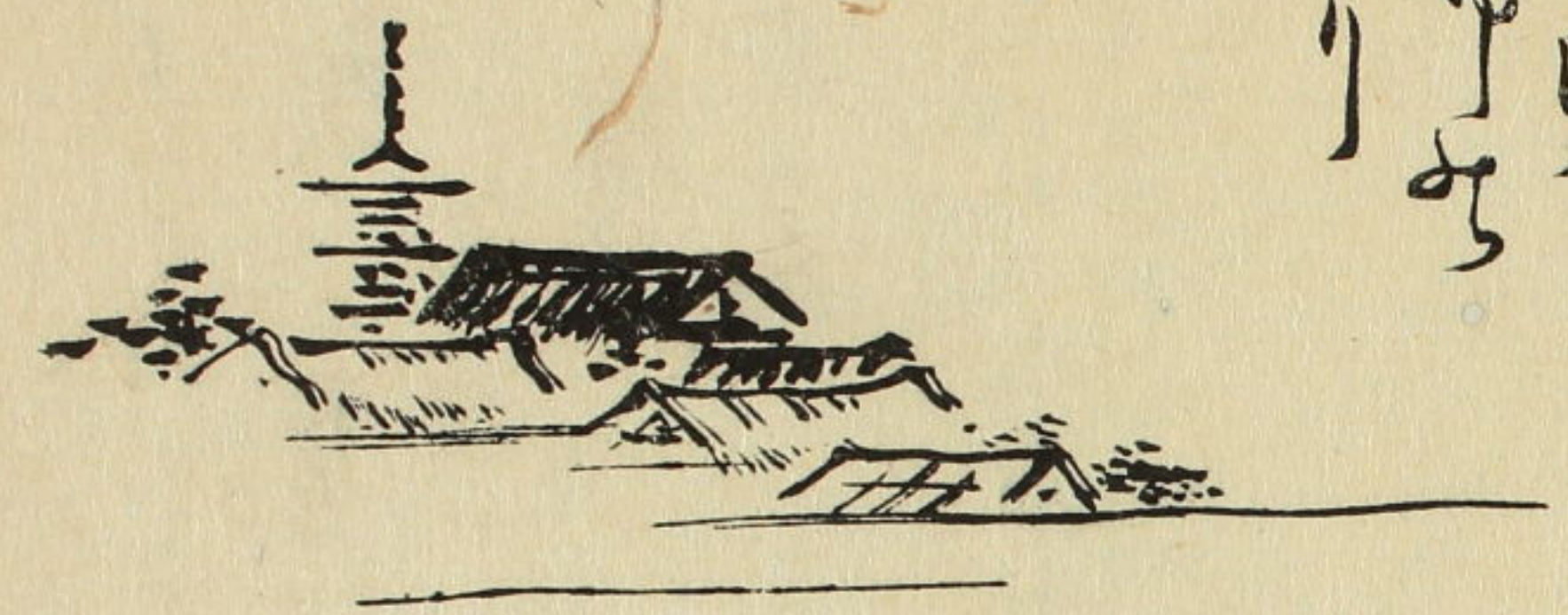
十

まゝ場ヲ
定メタル所

〜

古きおぼしめ

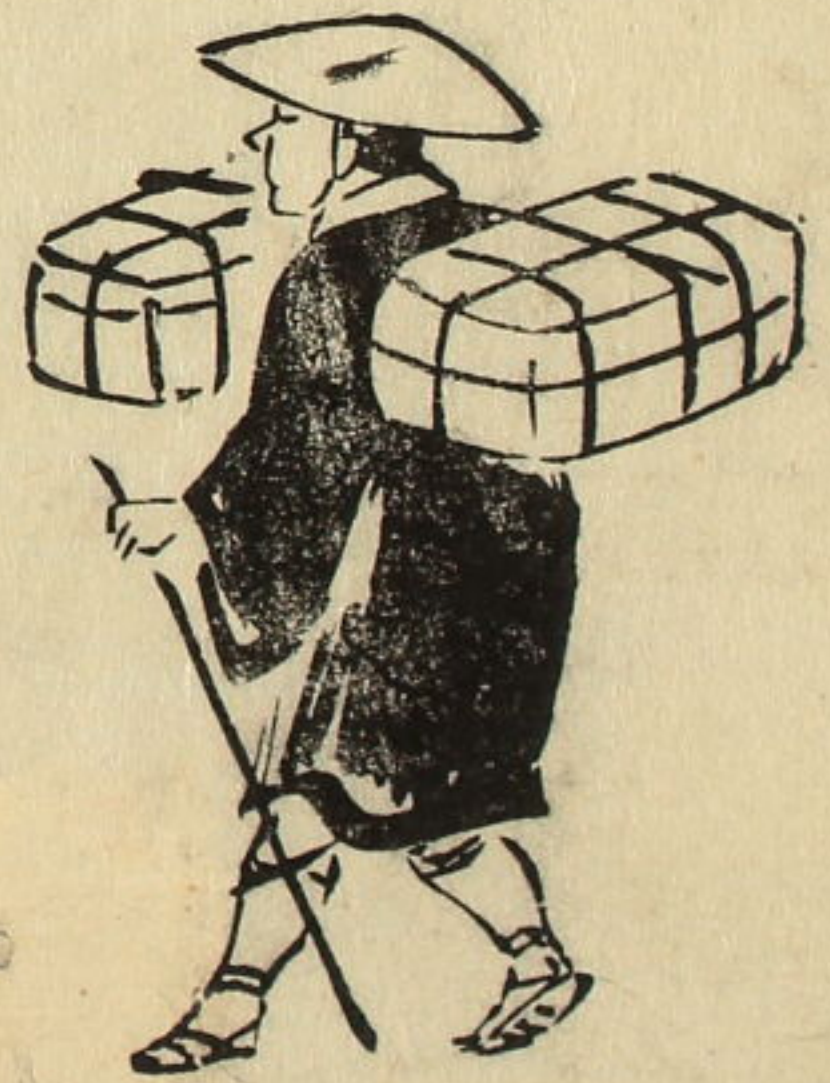
世に於り



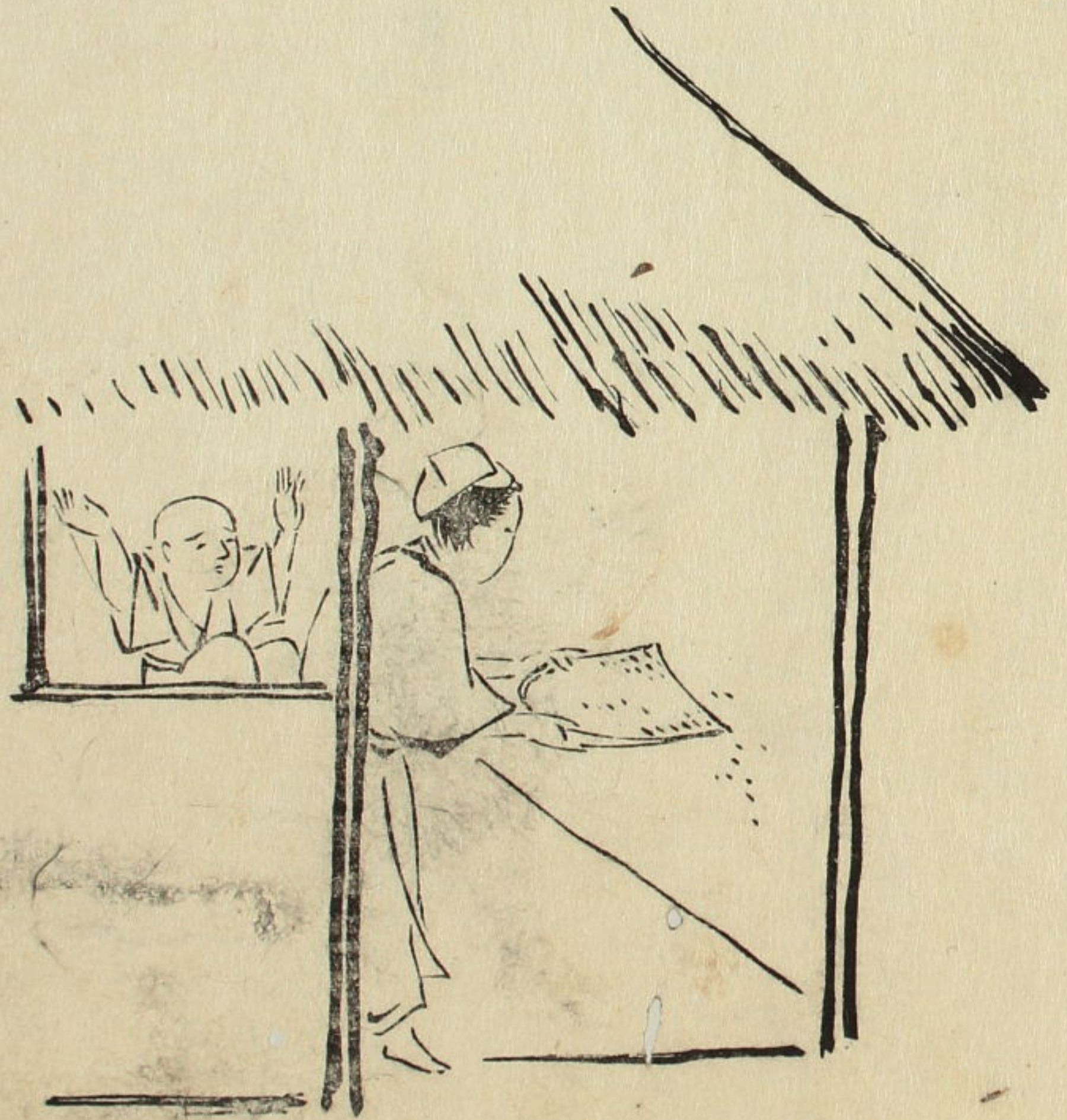
子 子 子

子子子

旧都ヲ向階ニ
シタル跡方
月見と尚子
やうて松と河
余申ノ安
林風子細の
岩やく石北宮電



あまの田家
西条の糖の
夕アさひらよ
内ノ屋敷
行端
子ハあまの
松と河

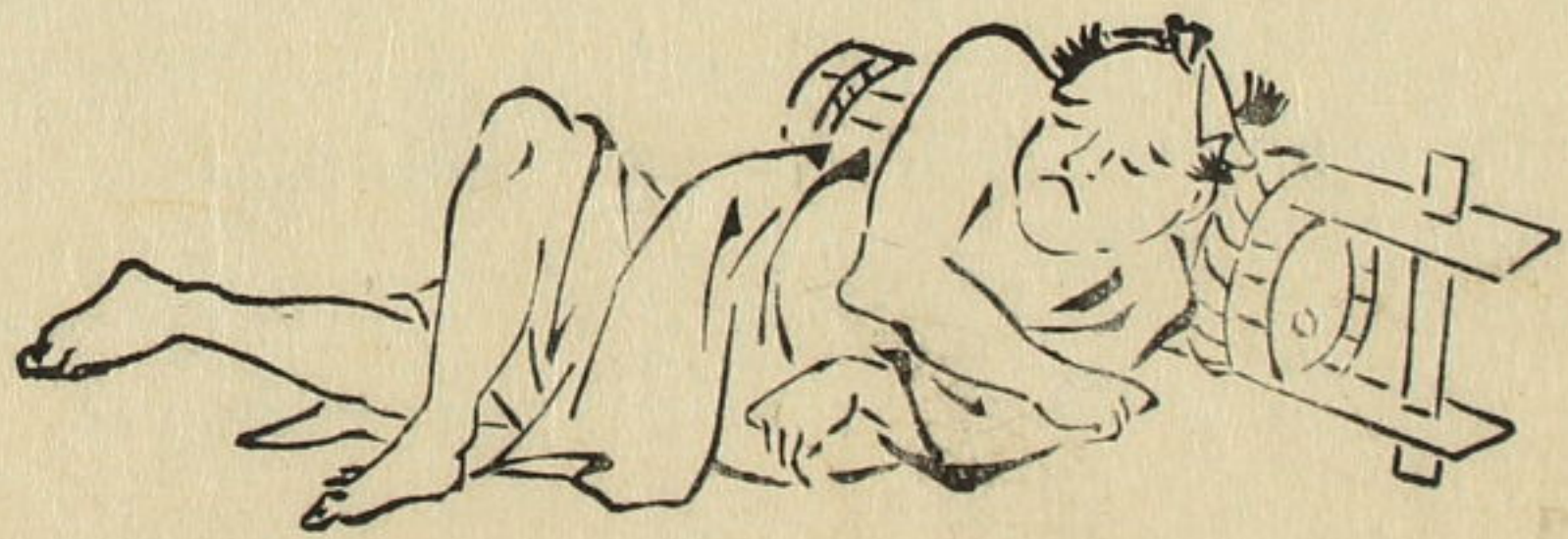


子子子

十一

夏北の女
職人此不あしむる世の情

南におもてよ
女くさむる事
伸じ



あつと生多ふよふ月の雲	世草
みか并へるまのまのあ	成秀
しつめまて笑ひ掛ぬ花の葉よ	政通
猶こまける音はせこいお	木草
とろくと眠中とあるか馬の酔	惟無
押さる口とよふららの影	格陸

我ものよも引る潮のふき
正則

石のらる居れおをよも
楚江

薔有れ木江をえりてまかひ
勝重

金衣化りし日と町をり
葦香

拍子木も拍鳴ふ似れ打連を
免苓

階を隔る谷の大竹
正秀

月影もこる影も洞の上
則

只ちくくとこまの頃
重氏

粘こいき袴も枝と赤うらも
重古

好美の白梅と今節をきり
葉

年くおをよも并ひし古の歌
孝

こころ車もせぬまは日
則

春の葉の下に林をひき
睡

叫くもりれもあま色し
正幸

まけをいふあまうらな
江

いさられよよほをまき水
苓

行噴き人にかゝるは遠くを

香

せめて赤いしはなせを

無

風やこゝにふるまの涙し

秀

只いとしかと頼む際物

通

ちしとら吉ふ却れ世にあり

紫葉

月見か菊のやうな旅つ

草

枯風は細の宗やく石の電

苔

雲にふる糠の夕アさひお

睡

汗滴あふまゝあつたは

通

才細おを刀のさる方と

重成

古様は銀土器と赤く

柳元

寸るうらまゝおと

秀

職人かおあゝさる色の信

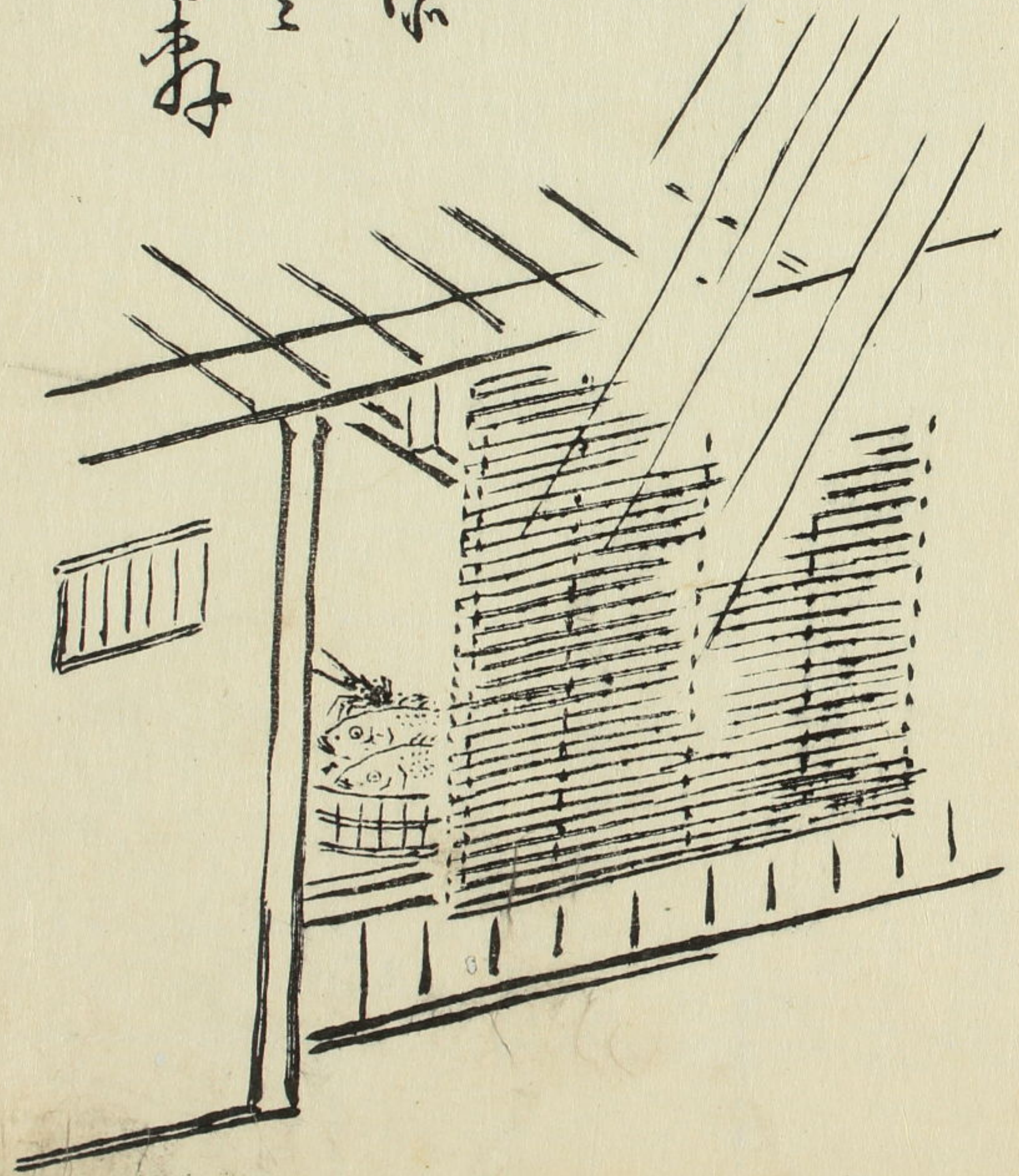
弦五

南おのりてよめむる

香

振賣の
厚あき
末謀

昭居の寺
防のハヤ
時百



為三一精書傳

書道しる書の

小書が引ひて

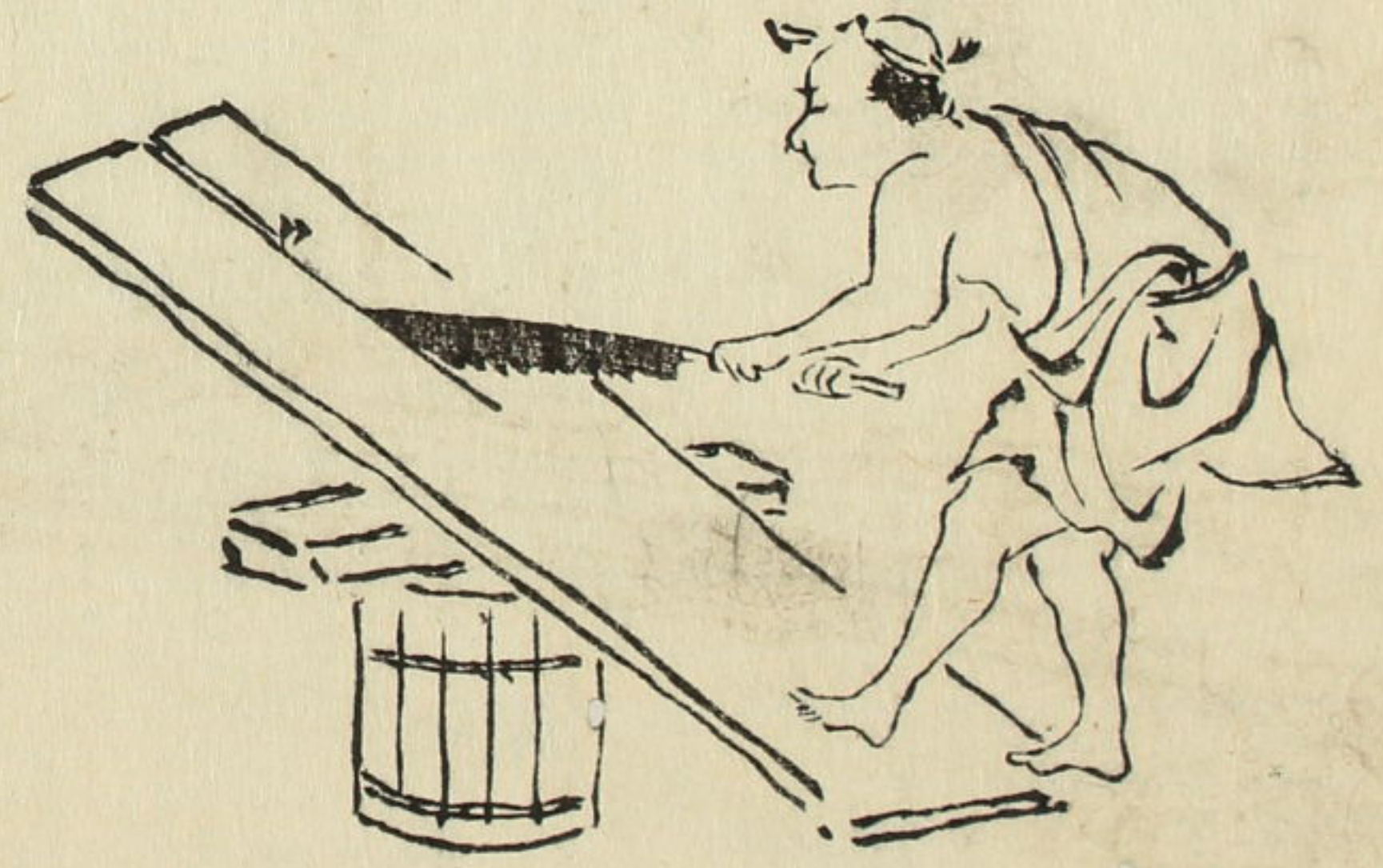
変化山方、

書道

斤元山

月と

あま



人の変化

好物の餅と

絶さぬ木の皮

玉ノ一字変化

武家用ノ所

刻木の安ふ

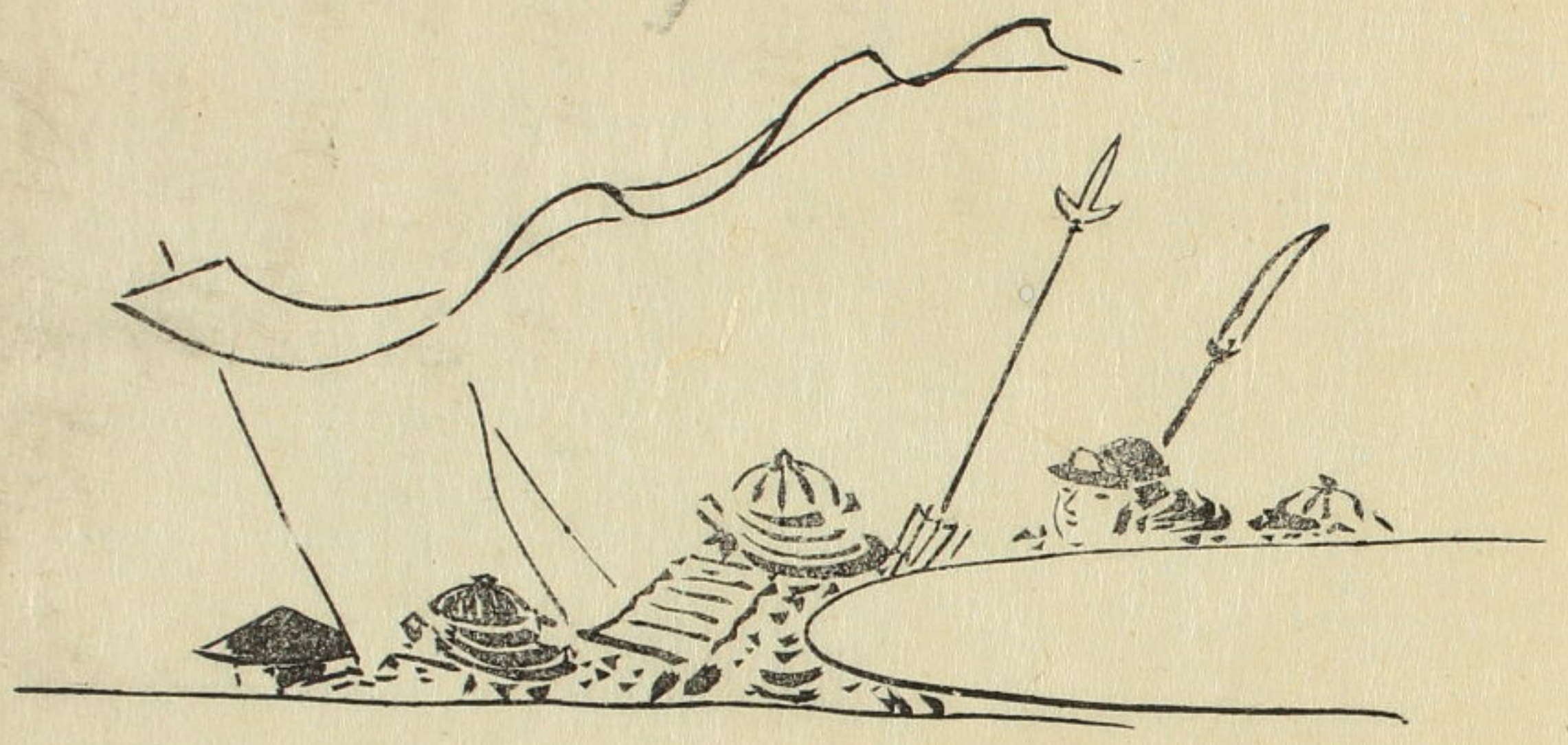
玉比高き事



香化草舟楫船
堂シタル安

細の者
をつまこみ子
まろかけを

天相ノ所
星さつ見えに
廿八日



見出しノ所
しるべきハ
附軍の
大なるこ
こりノ所方
陰亮の言ふ
難を述べぬ

愛化ノ安

明きくむお

くうちんをいけし

こゝ人ノ上

肩習子とる

湯碗のまき茶



人ノ愛化

よおきの千糸

刻むもうハのを

人ヲ京ハセ名愛化

るよ出ぬ日を

由て悲とる



子子集

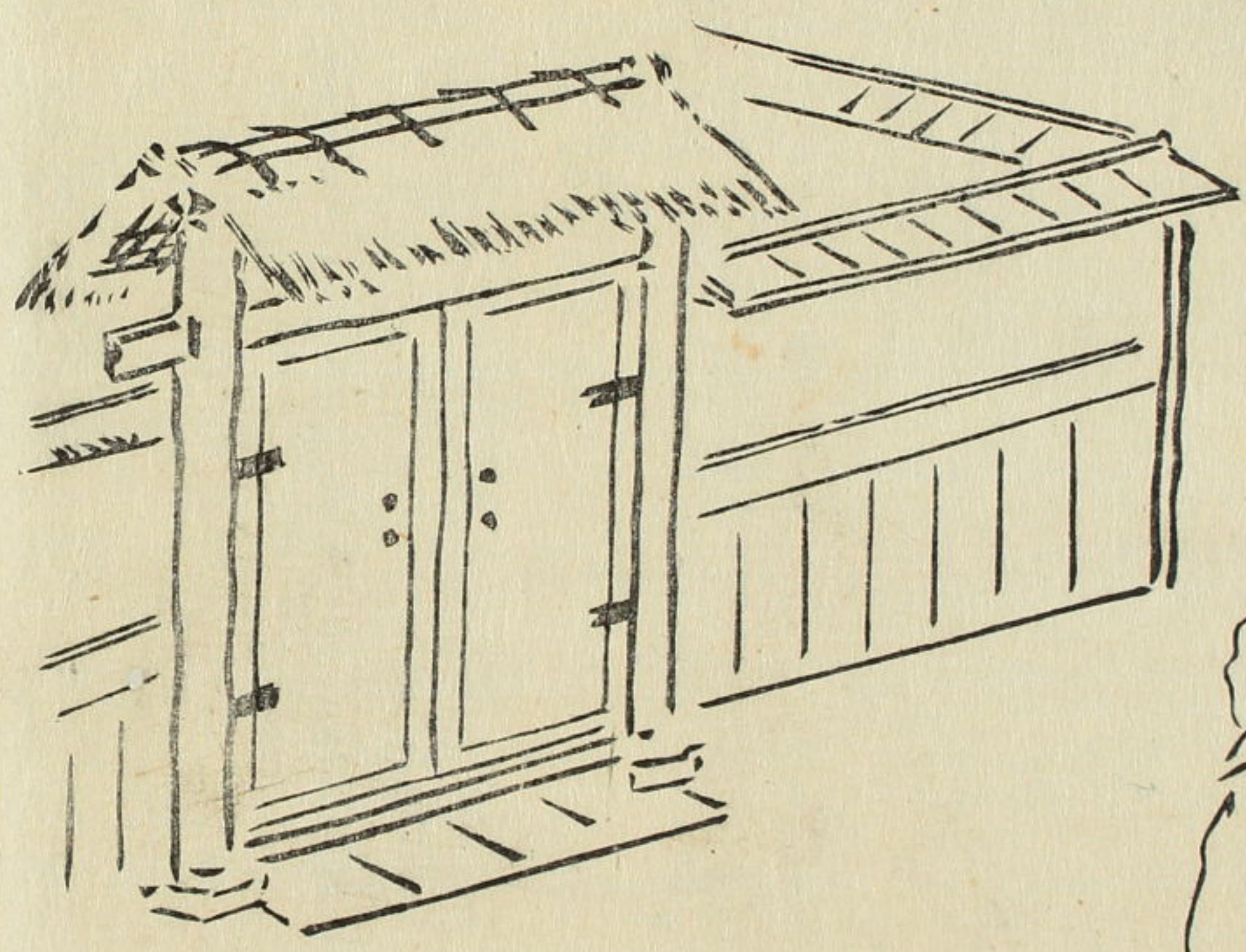
近陽

絹^{カセ}買の七ツ
下り成るつれて

唐木ノ家化

塀子門あり

五十石云



一六

塀^{カセ}切^{カセ}ノ定^{カセ}ノ
夕^{カセ}ル^{カセ}時^{カセ}

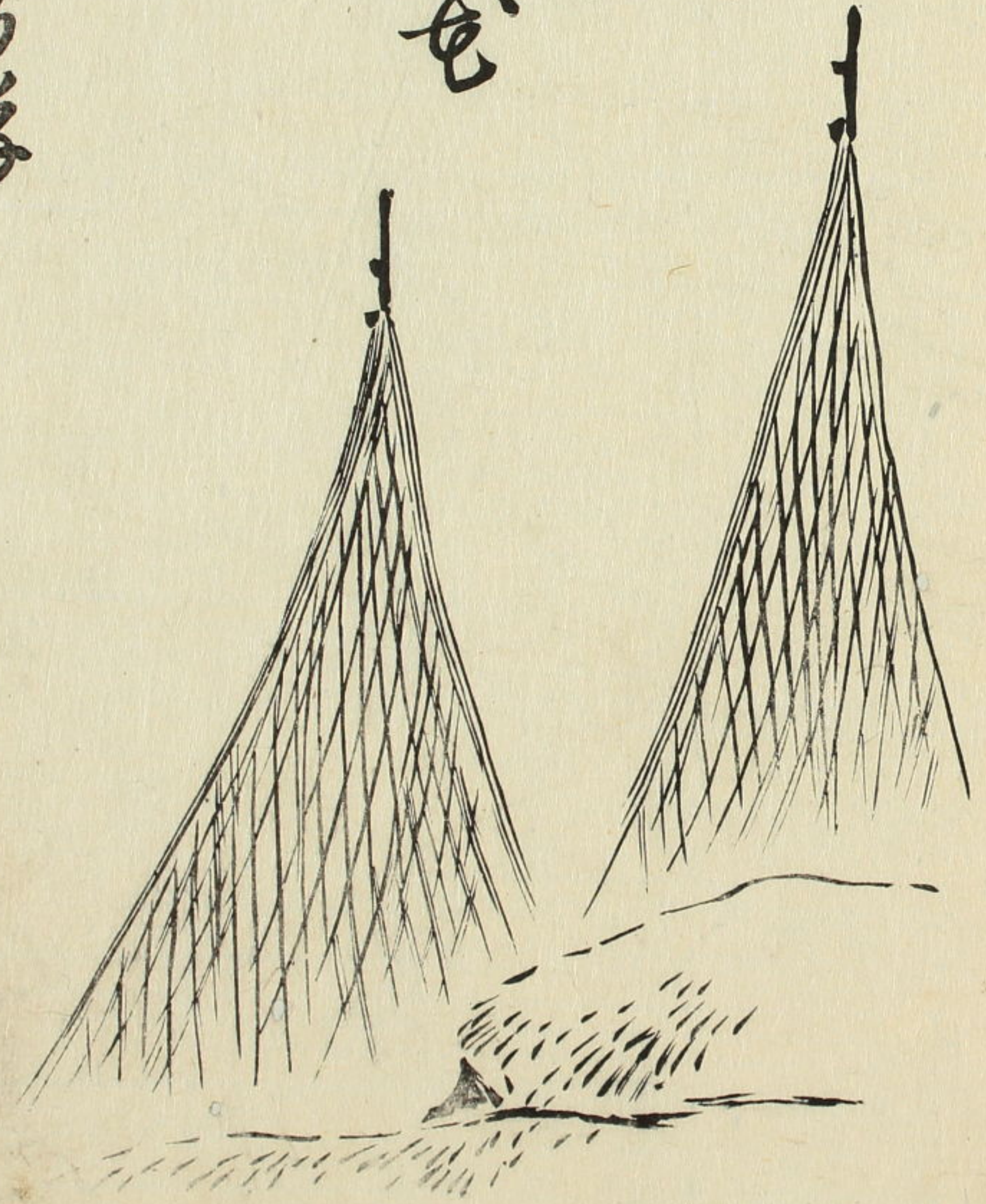
ヶ^{カセ}島^{カセ}此^{カセ}飯^{カセ}鬼^{カセ}心

子^{カセ}を^{カセ}抄^{カセ}月^{カセ}と^{カセ}也

伸^{カセ}に

袖^{カセ}子^{カセ}ぬ^{カセ}ら^{カセ}ま^{カセ}の

う^{カセ}つ^{カセ}る^{カセ}事^{カセ}也



子子集

子と集

埜ノ集化

新白田の

朱異七おちつく

堂の上

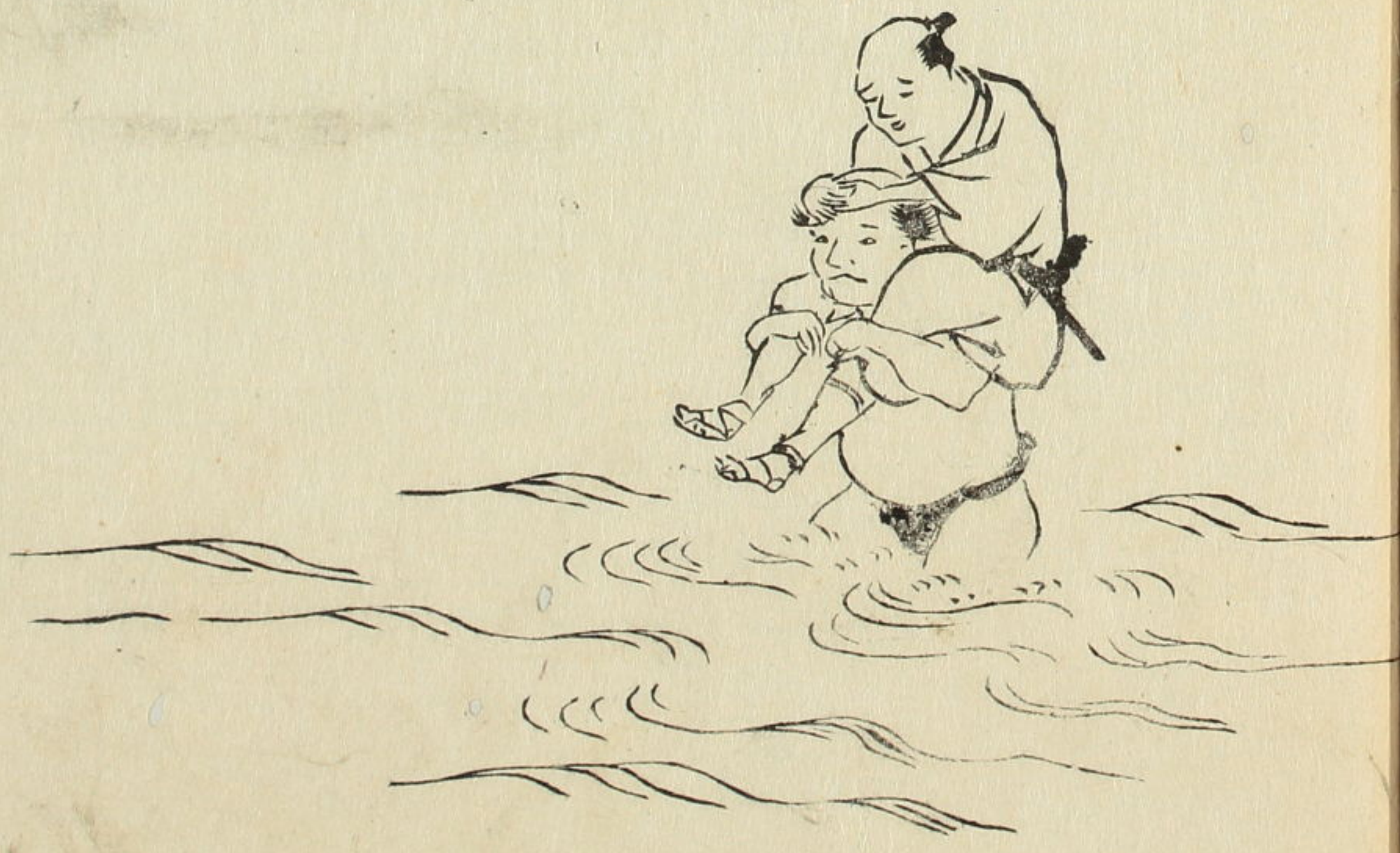
埜ノ人ノ安

以とれ

心とれ



心とれ
埜ノ集化ノ埜
川越の草の
水取あま



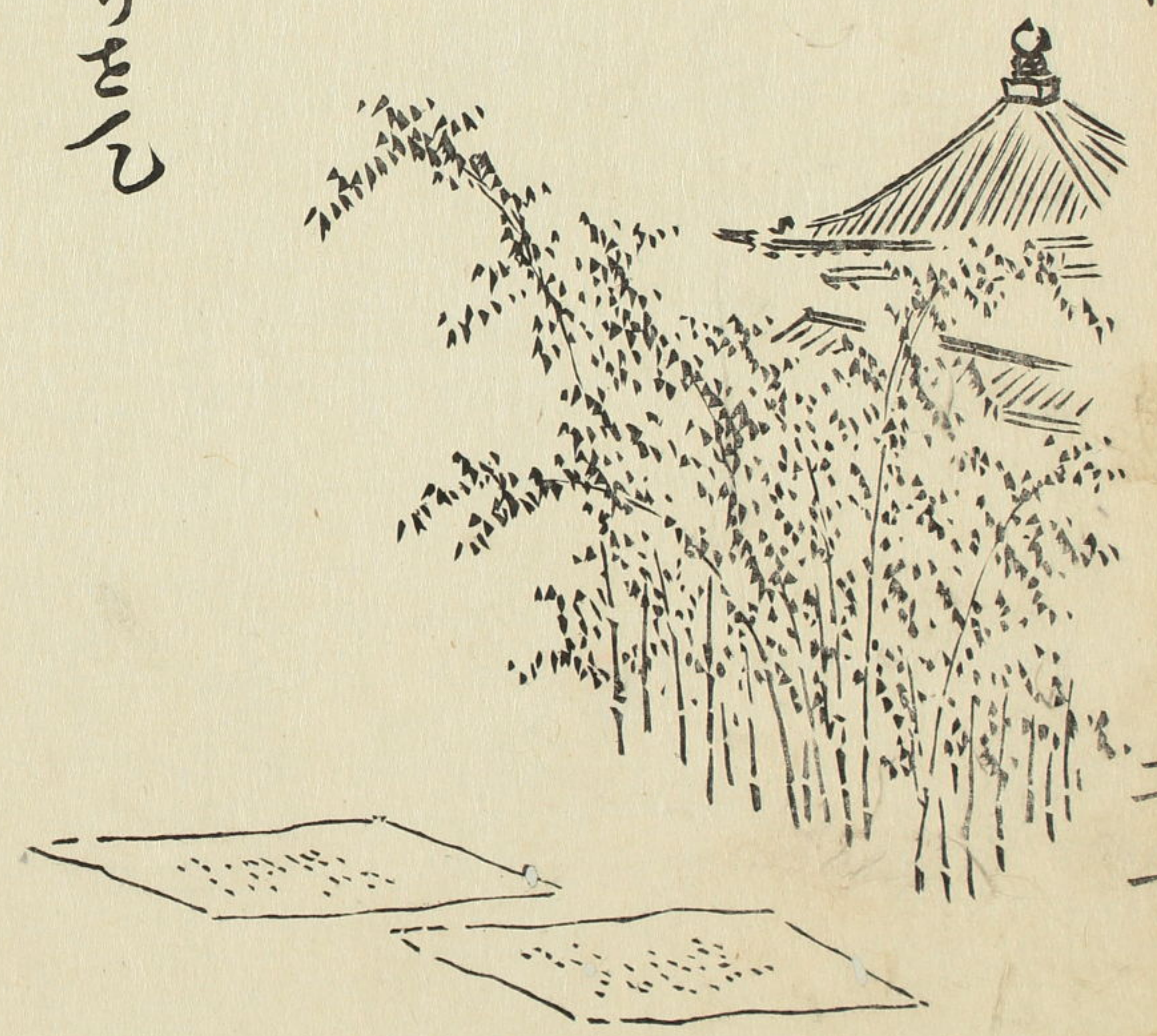
埜ノ集化

子て茶

あきり
三ノ生田
平地ノ坊ト
空ノタル所

平地ノ寺也
寺ノ茶也

用ノ所
干物と日向の
方いさらせん

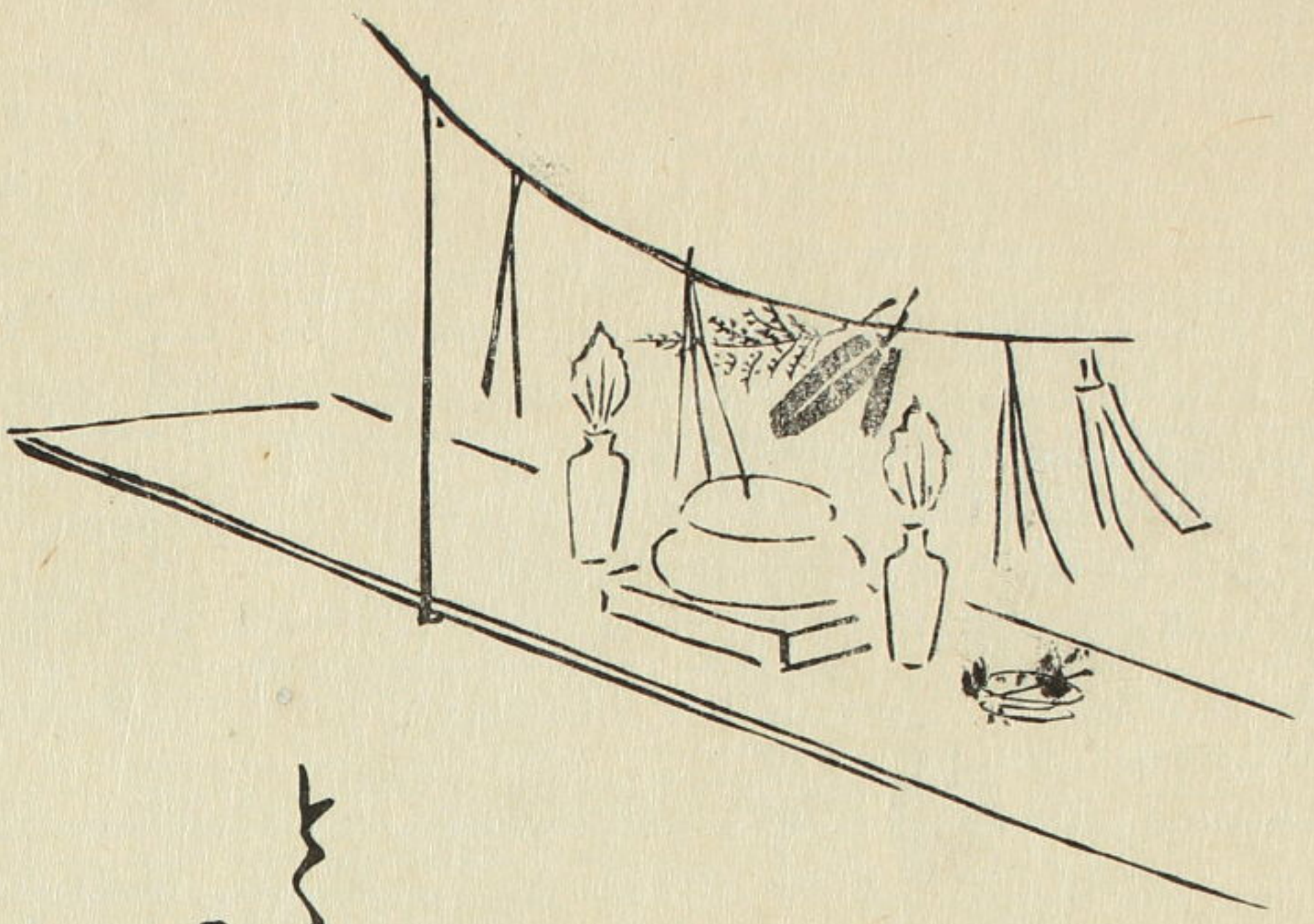


用ノ所
化
野の
草をとくし

平地ニ
空ノタル所
茶用子
住居

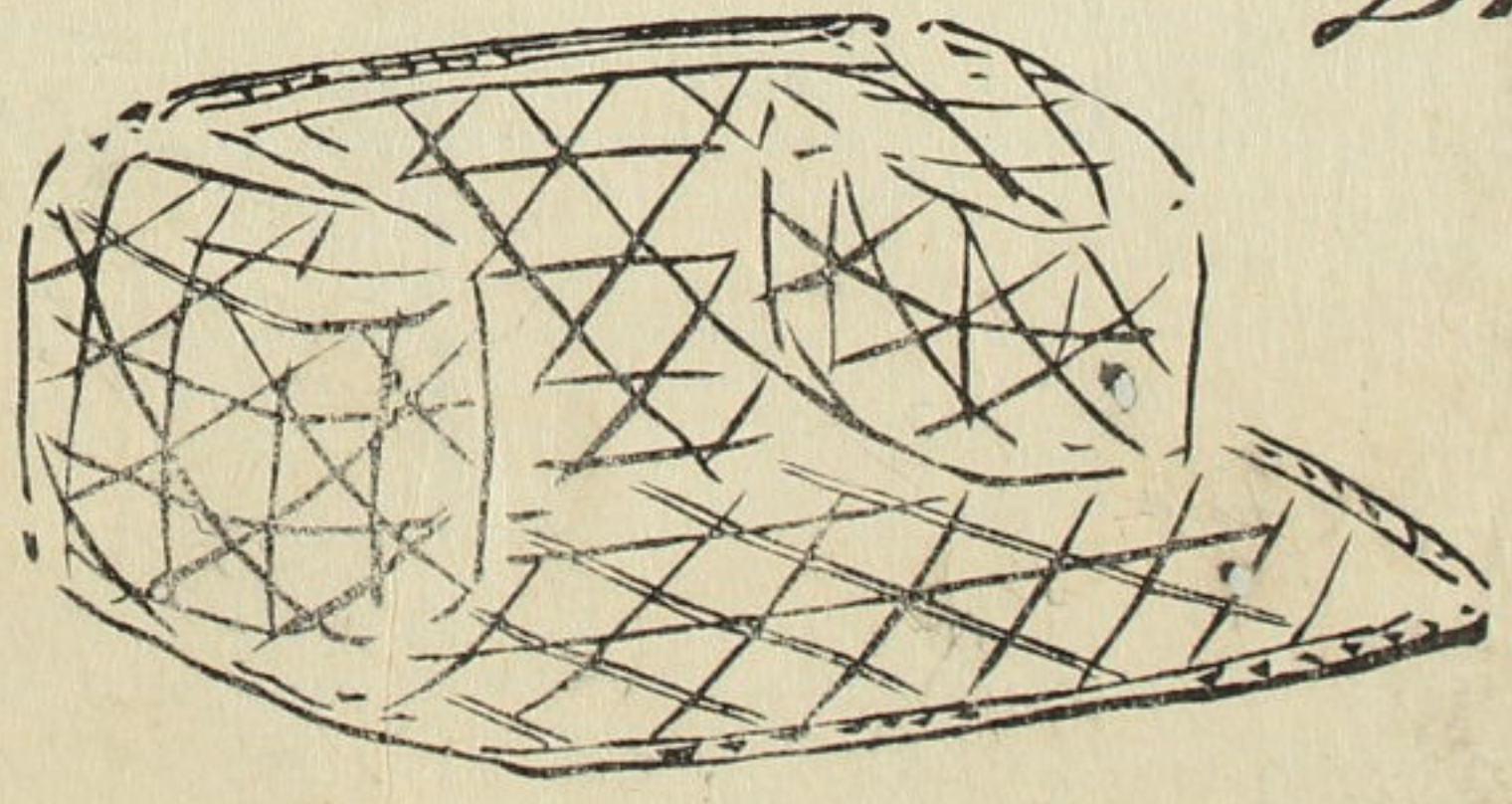


茶用子



肉ノ風情
白ノ意多座
みほほちか
娘よろこぶ

河津
とくくと
右海日七
四ツのうら



武家町家
世話ノ所

子子の好む
状此縁先

用ノ要化
中よこそ
胡堂合此
借りの



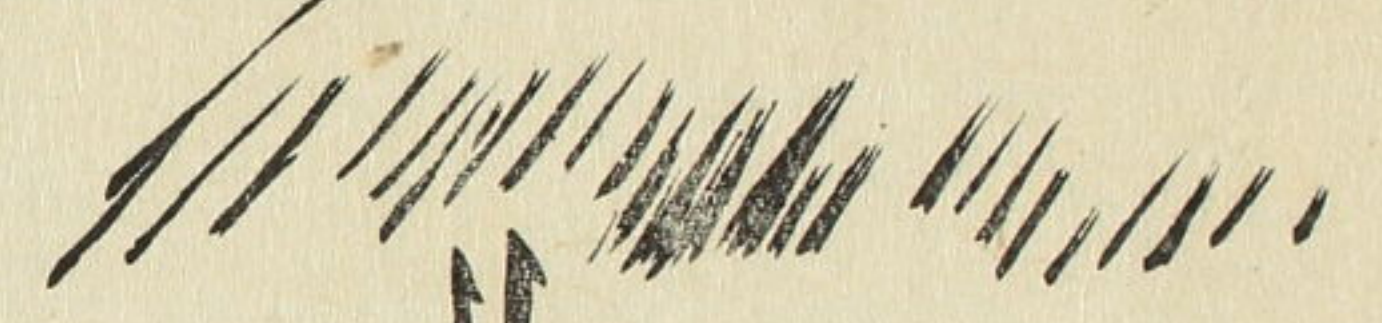
子子子

子子子

聖と

森と

夕日



あまの

あまの

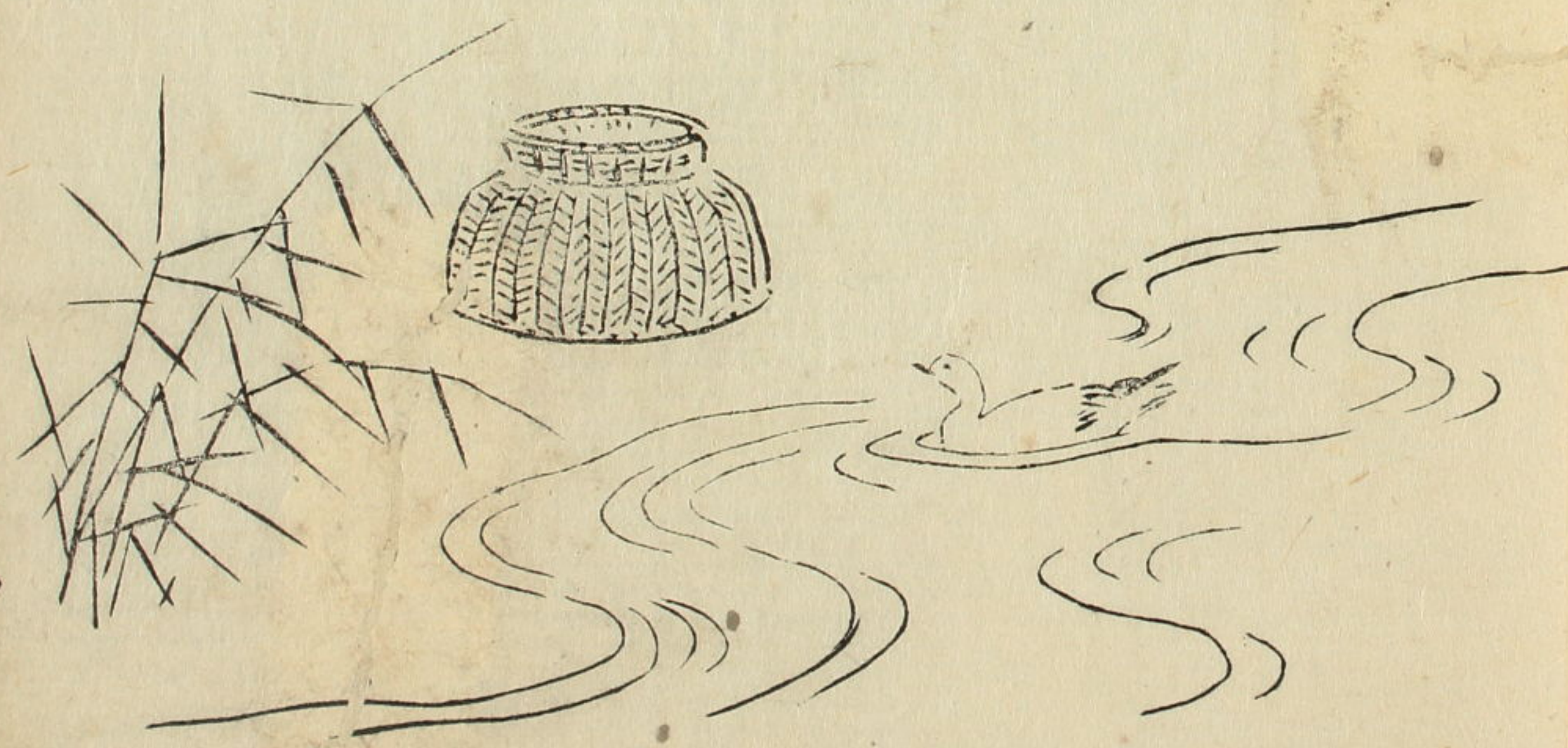
あまの



あまの

あまの

あまの



あまの

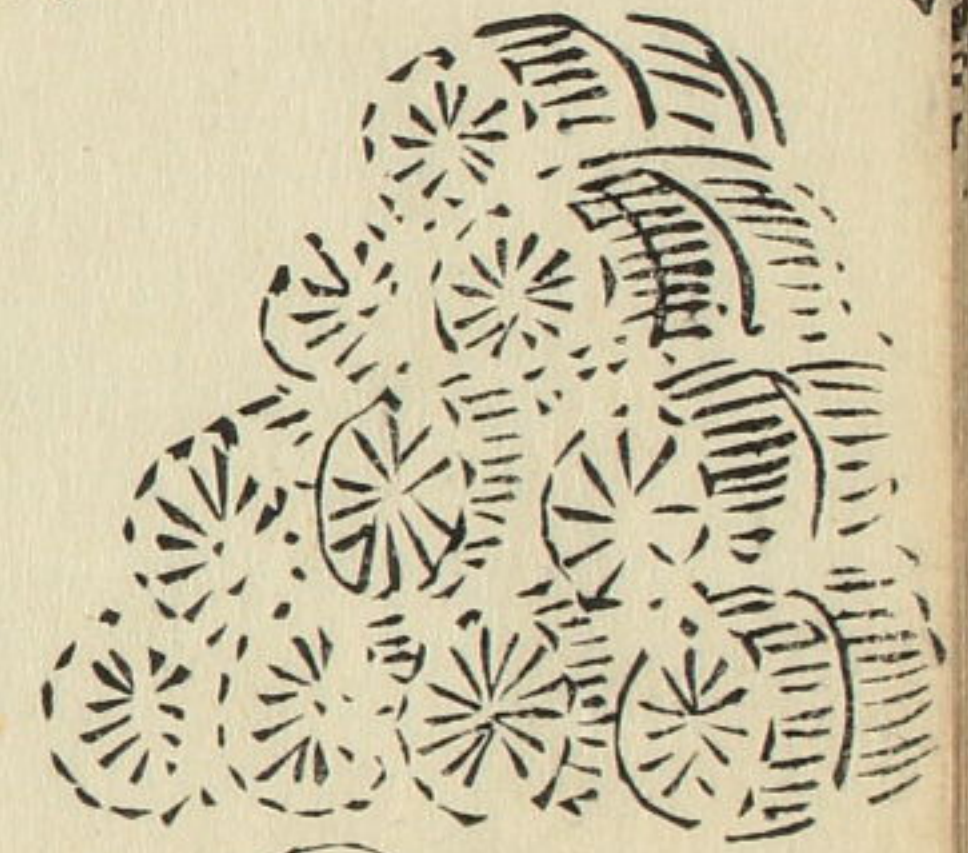
子子子

子子

場ノ変化

ち〜ち〜と

茶の相場の
川原



目黒川の
連此海流や

名所
場ノ定メ



河

とこも

せの

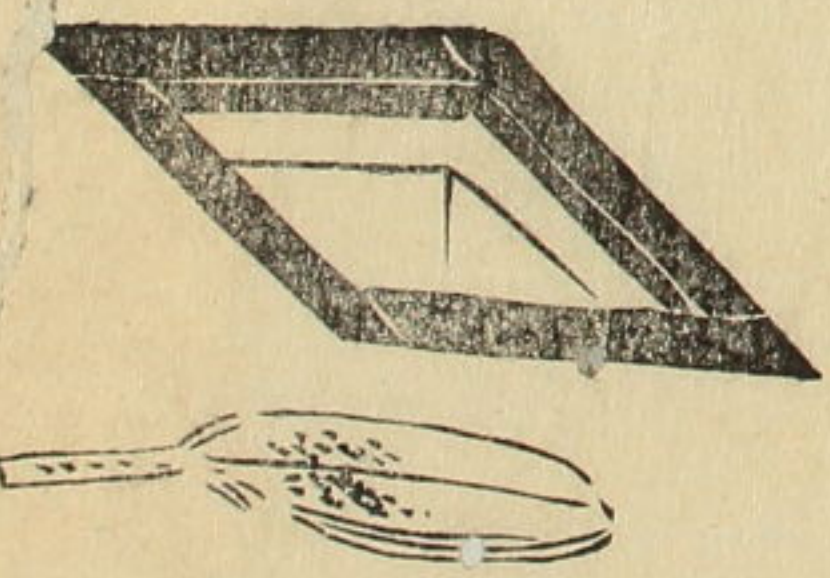
朝時



起情短ノ名録

梅山次の花

〜



長

二

振るゝのるあゝきし市後 草花
 防はていやまこ町有すお 隆坡
 書面は権のふきか列のしと 紹夜
 行元山 小月とんるん 利守
 好有北餅と絶さぬたのる 坡
 刻木のあふ玉のあをお 葎

子孫

二六

綱の者をつまみ子孫が是れ
 星さきつるは寸八日
 しるまよハ好軍比ちるこ
 淡丸のさる雑徒もさぬ
 心とつとむるらんをいづれ
 肩の骨子もる湯衣のさる葉
 上おきの二葉刻むもこの
 つるよしぬ日ハ内て想ふ
 葉 坡 屋 坡 葉

綱^カ買のセツ下り言つれて
 坪子門ある五十石を
 け島に俄思もを想月と也
 袖よぬくのうつるある
 然畠の来異におちつく
 川鉄の草の氷にあり
 平地の古れ為よ葉地
 葉 坡 屋 坡 葉

葉地

二六

予病を日向の方へいさむを
 境出を野に苞をくこ
 美其用か浮世をさるる衆
 又ゆはちふは 三ノ 塵
 とくくことちありて心の子
 此等子のぬむ此の縁先
 中よるそ爾等合に借いお
 聖をくよて孫をみ多月
 牛 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿

予病を日向の方へいさむを
 境出を野に苞をくこ
 美其用か浮世をさるる衆
 又ゆはちふは 三ノ 塵
 とくくことちありて心の子
 此等子のぬむ此の縁先
 中よるそ爾等合に借いお
 聖をくよて孫をみ多月
 牛 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿

長...

八

子孫

二

南卷
由中
德美
先生



文
弘
成
少
月

東
菴
於
弘
名
世

好

缺